

## 横須賀の祭りにおける女性参加とその意義

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学人文社会科学部社会学科文化人類学コース 公開日: 2017-01-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小森, 俊作 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10297/9961">http://hdl.handle.net/10297/9961</a>

## 横須賀の祭りにおける女性参加とその意義

小森俊作

- 1 はじめに
- 2 大祭における女性
  - 2.1 戦後復興期の祭りと現在の大祭
  - 2.2 女性参加のきっかけと意識の変化
  - 2.3 女連
- 3 青年との比較
  - 3.1 青年とは
  - 3.2 共通点と相違点
- 4 おわりに

### 1 はじめに

私は今回、大須賀地区でフィールドワークをするにあたって、2016（平成28）年3月1日と同年4月3日に事前調査を行った。大須賀地区の中心地である横須賀には遠州横須賀三熊野神社大祭（以下、大祭と呼称）があり、3月に訪問した際はちょうど4月に開催される大祭への準備が始まった時期だった。その際、字町の一つである西本町総代の石津康好氏（男性、60代）に大祭について説明を受け、西本町が属する「い組」の稽古場を見学した。石津氏によれば、三熊野神社そのものは聖武天皇の誕生を祝って熊野神社の御分霊として祀られたものであるということにより、子授けと安産のご利益があるといわれ、大祭期間中に「おねんねこ様」と呼ばれる神子を模した人形を抱く「神子抱き神事」という神事がある。また、神社に奉納を捧げる本祭りと祇里と呼ばれる山車を各字町が曳いて回る附祭りがあり、稽古場では予想していたより多くの子どもたちが附祭りの際に奏でる祭囃子の稽古に励んでいた。期間を空け4月に訪れた際は、横須賀は祭り一色となっており、特に人の数に圧倒された。3月の時の静かな歴史ある町並みと穏やかな雰囲気とは打って変わって、大勢の法被を着た人びとの持つエネルギーに溢れ、活気だっていた。若者たちの姿が多く、彼らがそれを支えていたのはすぐにわかった。



写真 1 衾里を曳く人びと（岡田撮影）

私が興味を持ったのは写真 1 のようにその中に混じって生き生きとしながら祭りに溶け込んでいる女性の姿が見られたことだ。一般的に日本に見られる多くの神事や祭祀行事において、女性は参加できないという風習が存在する。これは女性の持つ「血穢」や「ケガレ」に理由があるとする不浄観説が多い。林英一は自身の著書『民俗と内的「他者」』に採録した「四月三日 女の節句 女人宮ニ参ルヲ許ス」という江戸時代の記述に対し、「このことは組織としてだけではなく、神社そのものが女性を受け入れていなかったことを示すものである」と述べている（林 2009: 184）。このように、神聖な存在や領域に対し女性の持つケガレは悪影響を及ぼす、と見られていた。

しかしながら、時代が下ると女性が祭礼行事や祭りに参加するという記述や記録が増えてくる。宮田登は下田の太鼓祭りを例に挙げ、戦前は参加を許されていなかった若い女性らが、人手不足を理由に太鼓台上に上っているという実情を示している。この事例は戦時中に男手が足りなくなったことが、人手不足時の緊急対応として受け入れられていったからだという（宮田 2006: 108）。このように、もともと女性は立ち入ることを許されなかった空間としての祭りに、第二次世界大戦後ごろから女性の参入の事例が多く見られるようになった。

事前に調査をした段階では横須賀の大祭は神事色が強く、威勢のいい男衆による祭りだと私は捉えていた。しかし実際に私が見た大祭は、女性を避けるような雰囲気はなく、参

加する側として祭りを楽しむ女性たちが大勢いた。ここには先ほど挙げた事例のような変化があったのか、それともこれは以前から変わらない姿なのか。現在祭りに参加している女性たちは現状をどう捉えているのか。そして今後の横須賀にどのような影響を及ぼすのか。こうした問いを立てた上で、本稿では横須賀を語るうえで非常に重要なキーワードとなる「祭り」と、それに関わる女性の参加とその意義について特に女連という組織に着目することで考察する。

## 2 大祭における女性

本節ではまず戦後からおよそ 30 年の間、大祭が下火だったと言われる時代からどのように復興をしてきたのかを記述する。加えてそれまで参加することのなかった女性たちが祭りに参加するようになった経緯を述べる。

### 2.1 戦後復興期の祭りと現在の祭

私が聞き取り調査を行った人びとの多くは、「戦後は特に大祭が荒れていた」と語った。祭りの運営を 30 年近く続けている萩原由巳氏（男性、60 代）によると、戦争から解放されて自由になったこと、当時の治安の不安定さ、祭りの時は無礼講であったことが背景としてあり、荒れていたという。大祭期間中、女性は外に出歩いてはいけないという風潮や、酔って祢里を曳く道中の橋から落ちる人も毎年のようにいたという。そうした中で本来の神事としての祭りをないがしろにする、ただ飲み騒ぐ風潮ができていた。受け継がれてきたものが失われることを危惧した当時の若者らが、作家で有名な志賀直哉の弟であり、当時東京で知識人同士の集まりを開いていた志賀直三に宛てて、横須賀の祭りを紹介する文を送った。志賀は大いに興味を示し、その後もやりとりを続け、彼の協力により、1955（昭和 30）年に大祭の祭囃子である「三社祭礼囃子」を静岡県無形民俗文化財第一号に登録するに至ったという。

この登録以降、横須賀の人びとの意識に自分たちの祭りやお囃子が文化的価値のある誇れるものだ、という新たな意識が芽生え始めた。それにより保存会や観光協会、遠州横須賀倶楽部といった団体が設立された。こうして、若者主導による改革で横須賀の祭りは復興していった。

現在、「横須賀の 1 年は祭りで始まり、祭りで終わる」と横須賀の人びとはよく口にする。それほどに横須賀における祭りの優先度は高い。無形文化財登録以降の意識の高まりが、横須賀の人びとを動かしている原動力であることは間違いない。

平成に入って、その意識が一層盛り上がる出来事があった。1996（平成 8）年に三熊野神社大祭の祭囃子や祢里のルーツである神田祭に里帰りという形で横須賀から祢里が 2 台参加したのである。遠州横須賀倶楽部の鈴木武史氏（男性、50 代）によると、このイベントにより三熊野神社大祭の知名度とともに、横須賀の人びとの祭りに対する誇りが急上昇

した。それと共に横須賀を出て行った人びとも戻ってきてくれるようになり、それまで少しずつ参加してきていた女性たちも以前より気軽に祭りに参加できる雰囲気がつくられたという。その際に東京に出張したのは、祢里が一つでは物足りない、という理由から河原町と東本町の2町だった。本来ならばその町の祢里はその町の人が曳くのが当たり前であり習わしだったのだが、せっかくの機会ということで正装をしていれば他の町の間も曳いてよいこととし、およそ1000人で行くことになった。神田祭では観客も横須賀の間が圧倒的に少ないため白い目で見られることなく女性が祭りに参加して祢里を曳くことができた。このことが女性参加に対する雰囲気を一変させたという。実際に私が本年度の三熊野神社大祭を訪れた際には、祢里を曳き廻す若い男性陣に混じって女性の姿を多く見ることができた。現在の祭りは老若男女問わずに参加できる雰囲気と熱気を持っている。

## 2.2 女性参加のきっかけと意識の変化

ここからは前節で述べた復興の経緯の中で、女性たちが祭りに参加するようになったきっかけと意識の変遷をみていく。もともと三熊野神社大祭は、神事が主体の本祭りとして、祢里を曳き神輿のあとについてまわる附祭りに大まかに分けられるが、どちらもその中枢になるのは男性である。冒頭で説明したように、女性が神社における儀礼から排除されるのは、血穢やケガレ、不浄観といった概念が存在するからである。波平恵美子は、そうした排除がなされてきたのは、女性そのものというより、女性が月経や出産という現象を伴う存在であるためだと述べている（波平 1985: 15）。

こうした理由で、以前、女性たちは大祭期間中は家で客人のもてなしのための準備や接待をしていた。「親に外に出たらダメと言われた」「外に出たらバチが当たる」という当時を知る女性たちの声が、祭りから女性が排除されていた状況を裏付けているといえる。女性で初めて祭りに参加した太田聖子氏（女性、50代）によると、当時の女性の中にも祭りが大好きな子はたくさんいた。祭りの賑やかな様子は見ていて楽しかったというが、女性は家に残り、祢里曳きの道中に立ち寄った客人に対して料理などのもてなしをしなければならぬといった事情により、女性の祭りに対する思いは決して良いものばかりではなかった。そして祭りを復興に向けて主導していた青年たちが青年幹事会を発足させ、以前よりも世情が安定してきた時期になると、太田氏は彼女を含む祭り好きの女の子のグループで参加をさせてもらった。それができたのは、太田氏が幼いころから（女の子が付く役である）おかめをやっていて皆に顔を覚えてもらっていたこと、当時の「青年」の中心にいた若者たちと知り合いであり、馴染みやすい雰囲気を作ってもらっていたことが大きいという。それ以来、徐々に女性の参加者が増えていくようになった。現在では多くの女性参加者が見られるようになり、「荒れていた」といわれる時代を知っている世代の人は口をそろえて「きれいで気持ちいい祭りになった」と語った。

### 2.3 女連

本項では、前項で示した女性参加のきっかけから生まれた女連（によれん）という非公式の集まりと、その機能を記述する。

女連とは、西田町の祭り好きの女性たちによって構成される有志の集まりのことである。女連の一員である丹羽直子氏（女性）によると、集まるようになったのは女性参加がだんだんと浸透し始めた 1980 年代～1990 年代ごろで、女子が担当するおかめの役を教える役目を当時の西田町の「青年」の幹事に頼まれたことがきっかけであった。現在は奉納祭を担当する町は順番で回るようになってきているが、以前は奉納の役をどの町が持つかくじ引きで決めていた時期があった。その際、中央公民館で奉納役以外の町が集まり祭囃子のステージ発表をする場があったという。そのステージでのクオリティを上げてほしいという「青年」からの要請のもと、最初は丹羽氏一人で教えていた。その後、後輩たちが高校を卒業すると、一緒に教えるようになっていった。稽古が終わるとそのまま居酒屋で祭りについて語り合うなどして交流を深めていき、現在もその流れは続いている。組織だった構成ではなく、あくまで祭り好きの女性たちが互いに祭りの話をする傍ら、女の子たちに指導をするという形をとっている。

女連の主な活動内容は、稽古場でのおかめの指導である。稽古をつけるのは自町の子どもたちだけで、教えるのはおおよ小学校 4 年生前後の子である。教えに来る女連のメンバーはみな「祭りが好きだから」という意思のもとに参加しており、以前のように正式に頼まれているわけではないが、稽古場に顔を出しているという。あくまで私的な集まりの延長であり大祭の時期以外はただの友人グループに過ぎないが、その持つ役割としては、祭りを運営するうえで重要な役割を果たす「青年」のそれと非常に近い。

## 3 青年との比較

本節では横須賀における青年を説明し、女連と青年を比較することで両者の持つ意味を明らかにしていく。その理由としては、2 つの集団が持つ社会的役割が似通っていること、青年が女連のモデルとして機能していることが挙げられる。

### 3.1 青年とは

一般的に青年という言葉自体は明治初期に形成された造語である。木村直恵によると、明治初期に見られた「青少年結社」という言葉がある。これは都市あるいは地方で知識や教養を促す組織やサークルに所属する啓蒙教育を受けた若者たちを指すものであった。これは後の青年団につながる流れの中にあり（木村 1998: 142-147）、このような流れを受けた明治政府は、地方を統率するための国家的機関の支部としてこれを利用し、全国の村や町といった単位で青年の統一をしようとする傾向が見られた。こういった国家的組織は社会的または職業階級などの階級制を包含し、国家の統一を図っていた当時の政策の一環を

担っている。戦後改革により政治的な意識は薄れ、地域によっては消滅、または形を変えて残っている（エンブリー 1978: 158-159）。

横須賀の事例は前述の形が変わった例に分類できる。横須賀の青年は大祭に密接に関わっているのが特徴といえる。青年に属する人の定義は各字町によってさまざまだが、広く捉えると高校卒業後から各字町の消防団に入団するまでの年齢層の男性、となっている。ここでは混乱を避けるため、「およそ 18 歳から 30 歳までの、大祭に参加する男性」と定義する。また横須賀ではよく上の世代の人からは「青年」よりも「若い衆」、「若衆」と呼ばれることが多い。

前述したように、青年は横須賀における年齢集団の一つである。横須賀に存在する年齢集団には、青年の上の代で大祭の現場監督と責任を負う祢里係と、さらにその上に字町の自治と大祭の全体の運営を指揮する総代の 2 つがある。大祭に参加する横須賀の男性ならば例外なくこの組織に加入しており、各字町のそれぞれの集団ごとに長を設けている。この長は、以前は完全な立候補制だったが、現在では少子化と人口流出に伴い集団や字町の中から選挙や指名で選ぶ、または持ち回りをするなどして選出される。本来はそれぞれの役の任期は大祭を基準にして 1 年だが、特に近年は下の年代に人がほとんどいない字町や集団においては特定の人物が役を継続することもしばしばあるという。長たちは大祭の準備が始まる 1 月から各字町と町全体での会議を行い、前回からの引継ぎや今後の予定立てなどを決める。

青年は年齢集団の中でも若い人びとで構成されているため、その役割は上の世代が決めた内容を実行する実働隊としての意味合いが強い。青年の主な役割としては、大祭当日に祢里の曳き回しに主要要員として参加すること、祢里の手入れ、太鼓、面、扇子などの小道具の手配、祢里や各家の軒先に飾る紙花の作成、大祭当日の準備の実働、子どもたちへの稽古等が挙げられる。

これ以外にも、各字町によって担当する業務は変わってくる。たとえば宮本の町であり、神事を昔から司ってきた西大淵地区の青年は、祢里を曳く附祭りに加えて地固めの舞（岡田の章を参照）などの本祭りの神事を担当している。2016 年度の西大淵の青年の幹事かつ幹事長を務めた降籬武氏（男性、20 代）によると、若くてエネルギーのある青年の活気が大祭全体の活気につながるので、実働的な面以外でも大祭を支える大きな柱であるという。また、大祭をさらに楽しむためにも大祭についての知識やお囃子などの技術を深め、同じ青年同士や稽古場でそれを伝えることでもっとかっこいい祭りにしていきたいという。

青年の役割の中でも特に重要なのが子どもたちへの稽古である。私が横須賀に初めて訪問した際に、西本町の稽古場を見学させてもらった。その日は稽古初日であり、西本町を中心とする「い組」に所属する子どもたち 23 人が参加していた。その日は青年 4 人で稽古を見ており、稽古の終わりには実際に大祭で用いる祭囃子を 3 曲披露してもらった。西本町の総代である石津氏は、稽古場は青年と地域の子どものコミュニケーションや教育の場でもあると語った。子どもたちは幼いころから稽古場へ通い、青年の姿を見て青年と

触れ合うことで縦の繋がり（キムの章を参照）を覚えていくという。

### 3.2 共通点と相違点

本項は青年の役割と女連の役割を比較する。この2つ集団の共通項は稽古場の存在である。稽古場で教える内容は女連の方が狭く、女連が存在するのは西田町のみ、という違いはあるが、稽古場をコミュニケーションの場として用いているのは同様である。3月から始まる稽古はだいたいこの町も厳しく、時に泣き出してしまう子もいるが、それは教える大人たちの大祭に対する熱意の表れであり、子どもたちもそういった環境で育つからこそ、大祭に対し特別な思いを持つようになる。また稽古場は縦社会の繋がりを伝え、横須賀の人がよく使う言葉である「祭りDNA」を継承させていく場になっている、と丹羽氏は語った。

次に相違点として挙げられるのは、その存在が公（ここでは横須賀に限定される）に認められているか、ということである。青年は大祭を運営するうえで、横須賀の各字町の共通項の一つであるが、女連に至っては西田町に限った団体である。これが示すのは、青年が女連の潜在的な模範として機能していることだ。前項に示した通り、青年という役に女性は参加できない。そこで公的組織の代替をする私的集団として女連を見ることが出来る。女連は青年の役割を代替するという目的で集まったわけではないが、あくまで結果として私的かつ限定的でありながらも、その一部を担っている。青年に入れないからこそ、祭囃子の技術や祭りの知識を共有させ伝える場としての、独自のコミュニティを形成しているといえる。

私は以上の点から、大祭における女性の新しい関わり方とコミュニティの形成を促すことができると考える。現在の大祭は一見大勢の人びとが集まり盛り上がりはいるものの、字町によっては20～30世帯しかなく祢里を出すのにも苦勞する実情がある。現に、話を聞いた人びとのうち、比較的上の年代の人びとは後継者問題や助っ人（内田の章を参照）の問題を挙げるが多かった。そういった中で女性たちは未だに役割らしい役割は担わせてもらえていない。しかしながら、現在の若者世代である降籬氏は「自分たちの世代は祭りに女性が参加している状態が当たり前だった。そこにほとんど疑問を持ったことがない」と語り、ここから不浄観的概念やそれに基づく女性の祭りからの排除は世代を経るにつれて変化し、現在もまた祭りに対する女性の新たな関わり方やコミュニティ形成の実現の最中にいると考えられる。

## 4 おわりに

このように横須賀における女性の祭りへの関わり方について、女連を通して女性参加のきっかけと青年との比較を交えて述べてきたが、今回の調査でわかったことは女性参加のきっかけとして、三熊野神社におねんねこ様のような女性にまつわる神事が存在すること



や戦後の青年の改革的な動きがあった。また、横須賀の祭りが外部から評価されて横須賀以外の人の目に触れる機会が増え、大祭への参加意欲がここ 20 年近い間で急速に発展してきているということがわかった。そして、青年の役割と女連の活動内容に類似点が認められることから、女性の新しい大祭への参加のありかたとして将来の人材育成や大祭の運営に影響を及ぼす可能性があるということを明らかにした。新しい女性の社会的役割の形として女連的コミュニティを作ることは、大祭を中心とした生活を送る一方で、日本各地でも見られる人口減少などの同時代的問題を抱える横須賀が生き残っていくための一つの回答になり得るだろう。

## 参考文献

エンブリー・ジョン

1978 『日本の村 須恵村』日本経済評論社。

木村直恵

1998 『〈青年〉の誕生—明治日本における政治的实践の転換—』新曜社。

波平恵美子

1985 『ケガレ』東京堂出版。

林英一

2009 「ジェンダーを民俗学的視点から捉える試み」『佛教大学大学院紀要 文学研究科  
篇』37: 179-194。

三熊野神社ホームページ

(2016年7月18日取得、<http://www4.tokai.or.jp/mikuma/mikodaki.html>)。

宮田登

2006 『日本を語る 11 女の民俗学』吉川弘文館。